

氏名	越後 正志
ヨミガナ	エチゴ マサシ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第603号
学位授与年月日	平成31年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 “ナラティヴ”の発現―「受け取り」による作品化― 〈作品〉 From here to there(こちらからあちらへ) 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	保科 豊巳
(論文第1副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	佐藤 道信
(作品第1副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	0 JUN
(副査)	東京藝術大学	准教授	(美術学部)	ミヒャエル シュナイダー
(副査)			()	森 弘治
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	

(論文内容の要旨)

本論文では、私が「忘れられた私以外の個人の物語」を見つけ、「物語」の象徴物の「直のやり取り」を行うプロジェクトを“ナラティヴ”と呼ぶ。本論文は、自身の芸術表現を「“ナラティヴ”の発現」として、その創作論について述べたものである。

私が心を揺り動かされるのは、「現場」で生まれる「直の人と人とのやり取り」である。プロジェクトには、常に私と「私以外の個人」が相対する関係がある。プロジェクトを行う場で、私は「私以外の個人」の現在から過去へ遡り、「忘れられた私以外の個人の物語」と「物語」の象徴物を見つけ、「私以外の個人」と「物語」の象徴物の「やり取り」を行う。本論文では、場や「私以外の個人」の現在と過去の相対関係を、「こちら」と「あちら」と総称した。私は2009年から2018年にかけて、「私」と「私以外の個人」、「こちら」と「あちら」の2つの相対関係を基に、幾つものプロジェクトを行ってきた。これらのプロジェクトにおける「忘れられた物語」の象徴物は、「借りる」「シェアする」「貰い受ける」という3つの方法でやり取りを行った。本論文では、この3つの方法を「受け取り」と総称している。

本論文は、以下の構成から成る。

第1章「“ナラティヴ”における2つの相対関係と『受け取り』の変遷」では、まず第1節「2つの相対関係」で、プロジェクトの基本となる、「私」と「私以外の個人」、「こちら」と「あちら」の2つの相対関係を説明した。次に第2節『『受け取り』の変遷』で、2009年から2018年までの15件のプロジェクトについて、それぞれの概要と各「象徴物」、時系列の流れを解説した。そして、時系列に沿って「借りる」から「シェアする」、「貰い受ける」へという、「受け取り」の変遷があることを確認した。

第2章『『私』と『私以外の個人』、『こちら』と『あちら』』では、「受け取り」の変遷について、3件のプロジェクトを中心に上げて考察した。第1節「直のやり取り：『私』と『私以外の個人』－『鳩小屋』プロジェクト」では、「私」と「私以外の個人」の「直のやり取り」が、現場でのインスタレーションに結びついていることを明らかにした。第2節「時代性：『こちら』と『あちら』－『電照菊とたばこ葉』プロジェクト」では、「直の人と人のやり取り」によって、当事者のような関係の物事となった「電照菊とたばこ葉」プ

プロジェクトについて述べた。その後「味噌作り」を習ったことが、「受け取り」が変遷する契機となったことを明らかにした。第3節「世代：時代を超えて残るもの－『鱈とわかめ』プロジェクト」では、「時代を超えて残るもの」が、家庭料理のレシピからアート表現まで、形を変え、人から人へ時代を超えて存在していること。そして私の場合は、「私以外の個人」「場」「時代」のアイデンティティの受け取り方法として、「貰い受ける」ことが最も理想的な「受け取り」であることを確認した。

第3章「アイデンティティの『受け取り』：貰い受けること」では、「貰い受けること」による「私以外の個人」「場」「時代」のアイデンティティの受け取りについて、近年の2件のプロジェクトを取り上げた。第1節「『残るもの』と『残すこと』－『バラ』プロジェクト」では、2016年から2017年に行った「バラ」プロジェクトを取り上げ、モノではない形で「残るもの」として写真、モノとして「残すこと」として鋳造について考察を行った。第2節「アイデンティティを見つめる－『おとりもち』プロジェクト」では、「語り」が、「忘れられた私以外の個人の物語」を記憶から呼び起こす有効な手段として働き、「私以外の個人」「場」「時代」のアイデンティティが、「忘れられた私以外の個人の物語」と結びつくことを確認した。そして、インスタレーションで「忘れられた私以外の個人の物語」に焦点を向けるために、「貰い受ける」対象を「個人」に絞ることを課題としてあげた。

第4章「“ナラティヴ”の発現：博士展出品作品『目を閉じて』」では、まず第1節「『中国製』プロジェクト－3着の『服』の『受け取り』」で、2018年中国・北京市で行ったプロジェクトの経緯と概要を説明し、現地で得た2つの「語り」について解説した。そして第2節「“ナラティヴ”の発現：博士展出品作品『目を閉じて』」で、博士審査展での「中国製」プロジェクトの作品化と“ナラティヴ”の発現について述べた。

結論では、「私以外の」人々を巻き込んだプロジェクトの実現こそが、私の創作の原動力であることを確認した。そして“ナラティヴ”は、「私」と「私以外の個人」に埋もれることのない「わからなさ」の可能性と未来を鑑賞者に伝えることであることを述べた。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、世界各地で名もなき個人の物語を本人との直接のやりとりから掘りおこし、物語の象徴物を使ったインスタレーション作品とするプロジェクトを行っている、筆者の創作論である。

1990年代以降、とくに2000年代に入って隆盛したアートプロジェクトには様々な形があり、目的も地域振興、コミュニティ再編など様々である。新たな活動形態だけに多くの場合、現在の時代や社会といったいわば“大きな物語”を共通背景に、実際には個々の状況に沿った多様な表現形態をとる。筆者の場合、英語力を生かして世界各地で個々人に直接向きあい、忘れられつつある個人の“小さな物語”を発現させようとしている点が特徴といえる。これまでオランダ、ベルギー、オーストリア、イタリア、ポーランド、ノルウェー、アメリカ、中国、国内では香川県小豆島、長野県東御市など、多くの地でアート・イン・レジデンスの形で活動してきている。

序章でまず、本来建築と美術の双方に関心のあった筆者が、一建築家というより周囲をまきこんだプロジェクトのような活動を展開する安藤忠雄に憧れ、美術大学の建築科を卒業後、現在のアートプロジェクトを行なうようになった原点のエピソードが記されている。第1章「“ナラティヴ”の2つの相対関係と「受け取り」の変遷」では、このプロジェクトが「私」と「私以外の個人」、「こちら」と「あちら」という2つの構造をもつこと。象徴物の受け取りは、「借りる」から「シェアする」「貰い受ける」へと変遷してきたことを述べる。第2章では、そのうちの「借りる」「シェアする」段階の3つのプロジェクト(ポーランド「鳩小屋」、小豆島「電照菊とたばこ葉」、ノルウェー「鱈とわかめ」)について解説。第3章で、「貰い受ける」段階の2つのプロジェクト(アメリカ「バラ」、東御市「おとりもち」)について解説。第4章で、北京での「中国製」プロジェクトと、それを発展させた提出作品「目を閉じて」について解説している。

小豆島と東御市のプロジェクトでは、いわば地区の歴史と物語にいったん視点が拡大されているが、改めて筆者の関心が極小の個人の物語にあることを認識し、提出作品では北京の一家族の物語を扱っている。提

出作品では、北京の両親、ロサンゼルスの子息、筆者の出身地の高岡市が結ばれ、従来の一地域密着からの新たな展開を示している。個人が世界と直接つながるのは、1990年代以降の情報化社会の特徴である。筆者がこれまで行ってきた、現地に赴き、個人と対話し、象徴物を受けとるという極めてアナログな方法論と、その発展形として世界に広がりつつある現在形は、現在のデジタルの情報社会へのアンチ、あるいは、人とモノによるリアリティ回復の試みなのかもしれない。論文作成が難航し、なお論述不足の感もあるが、現在の時代・社会に独特の切り込みを行なった学位論文として、審査会の承認を得た。

(作品審査結果の要旨)

2018年12月20日、越後正志の博士論文発表及び作品審査が行われた。審査には、主査保科豊巳先生、論文第一副査佐藤道心先生、作品第一副査O JUN、副査ミヒヤエル・w・シュナイダー先生、副査森弘治氏（アーティスト）の5人があった。

作者はこれまで国内外に於いて、あるきっかけを基にその場所で出会った人々との会話を続けるなかで相手の過去を遡行し、その記憶の中に残されているオブジェや言葉を見つけそれらを作者が受け取ることとでそこに新たに発生する物語を“ナラティブの発現”という芸術表現として様々なプロジェクトを行ってきた。作者の作品形式はインスタレーションである。今作品は展示空間に様々なモノを設置してある。北京に住む或る中国人夫婦と語り合うなかで彼ら個人の記憶や家族の思い出、現在はアメリカに住む息子のことなどについて語られる彼らの日常身边から種々のモノ（作者はこれらを「象徴物」と呼ぶ）に組み換え編集を加えて展示空間にインストールした。たとえば、彼らが故郷で常食とするひまわりの種を息子の古着のシャツを袋状に縫製したモノのなかに詰め込んだカウチクッション（作者はこれを「枕」と呼ぶ）、それらを円形に段差を違えて作ったベンチ状の立体物（鑑賞者はこれに座りながら設置されたモニターに映る作者と相手のインタビューの様を観ることが出来る）。積み重ねられたひまわりの種が入っていた段ボール箱。60～70年代に日本の家庭の応接間によく見られたデコラ張りの応接テーブル、その上には夫婦の住む北京、作者の故郷である高岡、夫婦の息子が住むロサンゼルス地図を円形に切り取り、それを相手の奥さんに麻地の布に横並びに縫い付けてもらったモノを額装し置かれている。象徴物としてのモノが置かれている背後のスピーカーからは、夫婦のインタビューに答える言葉が日本語に翻訳されて作者の声で聴こえてくる。これらのモノ、音、映像が鑑賞者の五感に触れ、しばし“作者と中国人夫婦”によって新たに可塑的、可變的に創出された物語に満たされた時空を遊ぶことになる。同時にインスタレーション全体がその場に居合えず鑑賞者個人の記憶や追想を促す装置として作動する。インスタレーションとしては決して高さのない、むしろ低めに設定されたそれぞれのモノが鑑賞者の視線を落としリラックスさせるしつらえのなかで静かに見え、感覚させられる作品となっている。ただ課題としては、審査員からは逆にこのインスタレーションの収まりの良さが指摘された。語り得る物語と作品がこのようにリンクし重なることでかえって表現の強度を失い、語り得ぬコトとしての作品の意味やリアリティが薄められている印象があるとの意見が出た。作者は論文で物語をキーワードに自己の制作の方法と目的、作品の効果について論述しているが、今作品は論文のそれぞれが妙に同調して制作（執筆）されているように見受けられる。作者は自分の着ていた服が“made in China”であったことに本作品の着想を得て制作したが、作家のイメージや他者への介入の仕方など知らず知らずのうちに自己のシナリオ通りに非常に丁寧に作り得てしまった感がある。思考と制作の両輪を動かしながら作品もいつか軌道を大きく逸れることで作者自身の想定をも超えて表現されるスケールや深さがほしかった。とは言え、作品のクオリティは高く、課題を残しながらも今後の制作に大いに期待できる内容であると評価し、審査員全員は「合」の判定をした。

(総合審査結果の要旨)

越後は現代美術の領域におけるインスタレーション作品の自己表現を「「私以外の」人々を巻き込んだプロジェクトの実現こそが、私の創作の原動力である」として高度情報化社会における情報コミュニケーションの現実に対し自己のリアリティーの所在を身体性を伴ったコミュニケーションに作品制作の原動力を見出している。

作品表現の拠り所を自己と他者や環境とのコミュニケーションから発生する“ナラティブ”な表現に新たな作品の可能性の確かさを指摘している。

論文では彼の外国でのレジデンス滞在を通じて出会った様々な異文化の人々とのコミュニケーションを通じ、その地域の社会環境における他者と本人との接触によって相対化される物語の構造が見て取れ、ナラティブの発生を地域での社会性の1断面と関連させて論述して行く。

論文は作品表現を自己の発言する表現から逸脱させ他者とのコミュニケーションによって地域社会に発生する“ナラティブ”を浮かび上がらせることによって現代美術における作品表現の新規性を論述している。

2009から2018までの6プロジェクトについて自己の作品プロセスにおけるナラティブの発現の仕組みを分析してプロジェクトを開催するに従って段階的に結論に至るというプロセスそのものの過程に作品思考を問いかけるような手法で論述していて極めて独創性を感じる。

博士課程学位発表作品は最後の中国で開催したプロジェクトでインスタレーションの形式で発表している。北京での老人夫婦との出会い、この夫婦とのコミュニケーションからアメリカに留学中の息子を回想する会話の映像、さらに息子の部屋に残された衣服や思い出の食料、展示会場にはこれらのオブジェと映像が配置され、再構築されたコミュニケーションの場が出現している。

スピーカーから流れる会話の音声は母親の中国語と作者の日本語で流されて観客をこの“ナラティブ”の構造の中に誘う仕組みが演出されている。作品は静かな生活の記憶と展示会場に展示された記憶のオブジェによって“ナラティブの構造を現出させ、そこに観客を体験させることで“ナラティブ”のリアリティーを浮かび上がらせている。これら自己体験に基づく論文、と作品は博士学位に値するものであるとして審査員全員が承諾した。